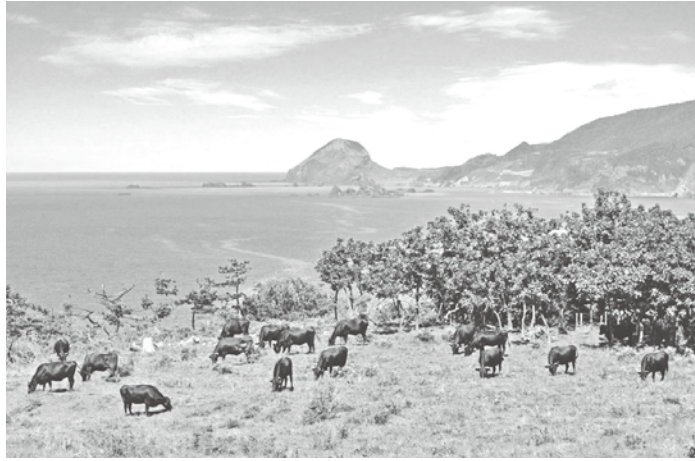


佐渡の和牛をご紹介します

繁殖農家の仕事とは？



佐渡と和牛との絆は深く、古くは田畑を耕す農耕牛や金銀山で資材を運ぶ役牛として活躍してきました。昭和30年にはなんと6000頭以上もの牛が佐渡にいたようです。

農業の機械化とともに役牛としての役割はなくなり、現在では約500頭と数を減らしましたが、今でも肉用牛として、新潟県の和牛振興を支える重要な役割を担っています。

この肉用牛の経営には、大きく分けて2通りの経営があります。

ひとつは、母牛を飼って子牛を産ませ、その子牛を1年ほど育てた後に出荷して対価を得る経営で、もうひとつは、その子牛を買ってきて、お肉にするまで2年くらい飼育する経営です。前者を繁殖経営、後者を肥育経営と呼びます。

平成24年現在の佐渡市の情勢として、繁殖経営が、農家戸数84戸、母牛の頭数が425頭で、肥育経営は、8戸で83頭となっています。

佐渡では古くから繁殖経営が盛んで、母牛から産まれた約300頭の子牛が1年間に出荷されます。

市場は年に3回、4月、7月、11月のそれぞれ2日に、高千家畜市場で開催され、市場のある旧相川地区北川内集落の海岸には朝早くから関係者の車がずらりと並び、活気を見せます。

セリに参加する購買者は、多くが村上などの県内産地や、岐阜、山形、福島など近隣の県から来ます。

取引の値段は年によって大きく変動しますが、先日の11月2日に行われた市場の平均価格は、去勢した子牛で43万円、雌の子牛が36万円で、これはなかなかの高値の取引だったといえます。

セリはボタン式によるセリで、電光掲示板に表示される金額は、1000円単位で競りあがります。

せり落とされた牛は、すぐに購買者の家畜運搬車に積み込まれます。

ここまですが繁殖農家の仕事で、手塩にかけて子牛ともここで別れ。この子牛たちは、肥育農家でほしい2年くらい飼育され、それぞれの銘柄牛になります。

